

アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺(1)

金子孝吉

はじめに

イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズ Alfred Parsons (1847-1920) は、1892年(明治25年)に来日し、早春から晩秋にかけて日本各地を旅行しながら、日本の植物と風景を組み合わせた水彩画を数多く描いた。パーソンズは、のちにイギリス王立水彩画家協会の会長を務めることになる画家であり、また庭園の設計家としても一家をなした人物である。さらに彼は、日本美術界にとって明治中期以降、三宅克己、大下藤次郎、丸山晚霞、石井柏亭を初めとする日本の水彩画家たちの活動に大きな影響を与えた点でも忘れることができない芸術家である。

パーソンズはのちに日本滞在時の記録を纏めて“Notes in Japan”という著作を発表している¹⁾が、それによると、彼は1892年、香港から船で日本に向かい、3月9日、まず長崎に上陸している。ついで瀬戸内海を船で通り抜け、神戸を目差した。神戸で少しばかり水彩画を制作したり、旅の準備をしたり、蓄積していた疲労を回復させたりしたあと、パーソンズは日本人の案内役のマツバ²⁾(Matsuba)を雇い、4月13日に奈良に向かった。そこで彼は梅や桜を見て廻り、それらの花を古寺や神社などを背景にして描いている。奈良では、とりわけ藤の花の美しさに彼は眼を奪われた。ついで、桜を描くために吉野を訪れ、

1) “Notes in Japan” は、1896年に単行本として出版される前に、*Harper's New Monthly Magazine* 誌に、1894年6月から1895年5月にかけて、6回に分けられて掲載されている(1894年6月号に“The Japanese Spring”, 9月号に“Early Summer in Japan”, 12月号に“The Time of the Lotus”, 1895年1月号に“Fujisan”, 4月号に“Autumn in Japan”, 5月号に“Some Wanderings in Japan”) というように、単行本の章ごとに分けられて掲載された)。

2) Matsuba はたぶん「松葉」と表記するのであるが、最終的には確認できないので、本稿では「マツバ」とカタカナで表記することにする。

また長谷寺へ行って牡丹の花などを見物している。その後、奈良に一旦戻ったが、彼は「どこか新たな写生場所を探してみたほうがよいのではないかと考えるに至り、琵琶湖畔にある彦根の町に、素晴らしい古庭園をもつ旅館があることを耳にして、私の次の冒険のためにそこへ行くことを決意した」。そして、藤の花がそろそろ終わりかけていた奈良を発ち、途中、宇治に立ち寄って茶摘みの光景をスケッチしたあと、おそらくは京都から東海道線の汽車に乗り、5月19日(木曜日)の夕刻、彦根に到着したのだった。

パーソンズは彦根で、まず、日本の大名気分を味わうことのできる「楽々亭」に投宿した。そこに泊まりながら、彼は城内を見学したり、玄宮園を描いたり、芹川の川原で催された競馬を見たり、町中の見世物小屋を訪ねたりして10日ほどを過ごしている。やがて、ツツジがもっと「たくさん咲いていて」、かつ「宿泊可能な部屋がある」仏教寺院が、町を見下ろす高台にあることを案内役のマツバが聞きつけてきた。そこで二人は楽々亭を出て、5月末にその寺へ移る。それが、曹洞宗・万年山天寧寺だった。

パーソンズは天寧寺で、ツツジを初めとするさまざまな美しい植物と邂逅できたことに感激し、また、高台に位置していた寺から見渡すことのできる城山や彦根の町並や琵琶湖の眺望の素晴らしさに息を呑んだ。さらに、日本人の家庭に深く入り込んで、日本人の普通の生活を身近で体験し、一家の人々と親しく交流することができた。パーソンズは、パスポート更新のために、やむなく6月18日には天寧寺を去らねばならなかったのだが、それまでの初夏の約20日間を満ち足りた幸福の中で過したのである。

パーソンズが著した日本紀行文“Notes in Japan”には、彼が日本各地で描いた水彩画やスケッチも挿絵として百点ほど収められている(ただし水彩画はモノクロの複製である)。本稿は、その“Notes in Japan”中にある記述と画を手掛かりとして、パーソンズが彦根の天寧寺で過ごした20日ほどの間に彼が何を見、何に興味を示し、寺の人々とどのような交際をしたかなどについて見ていきたい。また、その本に書かれて(あるいは描かれて)いる明治25年初夏時の彦根の自然、人々の暮らし、社会状況などについても言及することにしたい。

I . パーソンズと天寧寺との出遭い

“Notes in Japan” の “Early Summer in Japan” 「日本の初夏」と題された章の中で、天寧寺についてパーソンズは次のように書いている。

それは、Tennenji と呼ばれている小さな仏教寺院だった。かつては活気ある寺院だったようだが、今ではほとんど寂れているといってもよかった。寺は、広闊な稲田が尽きる所にそばだつ丘の斜面に建てられていた。琵琶湖岸沿いの湿地帯や点在する内湖のあたりでは、うるさい蚊の大群に悩まされるが、さすがにこの高台までは蚊もあまり多く襲ってこないようだ。“Ji” というのは仏教寺院を意味し、少なくともその語のもつ意味の一つではある、 “Tennen” とは「自然によって生み出された」という意味である。その名前自体が、平静と清閑と穏和を表している。これらの気持こそ、私がこの悦ばしい場所で見出したものなのであり、そしてそれらの感情は、あのツツジの花の薄紅色のペールに包まれて、私の心の中に今でも残り続けている。

一面に広がる水田を貫く道の端に、花崗岩で出来た道標が立っており、そこから、寺へと通じる小道が分岐している。道標に彫られた文字を読める人であれば、その寺が「五百羅漢 (the five hundred Rakkan)」, 仏陀の最高位の弟子たちに奉獻された寺であることが分かる。金箔に覆われたり漆を塗られたりした夥しい数の彫像が、中庭にある大きな建物の周りに階段状にしつらえられた壇の上に、整然と座していた。この建物の向こう側に本堂 (the Hondo) が建っており、主祭壇はそこに置かれていた。この寺の管理をただ一人任されていた老住職はその本堂で、夜が明けるとともにお勤めをはたしていた。私が宿泊していた部屋は、本堂に付属していた小さな離れだった。部屋の二面が庭に向かって開かれており、住職一家が生活していた部屋とはかなり遠く隔たっていた。

一面に広がっていた「水田」³⁾が尽きる山際から「小道」を登っていくと、まず眼に入ってくるのが、聳え立つ大きな五百羅漢堂である。井伊家11代藩主直中によって文政11年(1828年)に創建されたといわれており、堂内の正面両脇二間分と両側面各四間分に、京都の仏師駒井朝運が制作したとされる五百二十七体の木彫の羅漢像が並んでいる。

3) 明治26年測量の「大日本帝国陸地測量部二万分一地形図」を見ると、当時、東海道線(明治22年に大津 - 長浜間が開通した)より東側は、一帯が水田になっていた。

五百羅漢堂の後ろにある本堂は文化8年(1811年)の建立とされ⁴⁾、本尊は聖観世音菩薩である。その材は、東近江市花沢にある、現在国の天然記念物となっているハナノキであると言いつえられている。

パーソンズは天寧寺のことを Tennenji と書き表しており、また「自然によって生み出された」寺という意味だとしている。これは、日本語に不得手な彼の勘違いである。しかし、それに続く文章で、寺の名それ自身が「平静と清閑と穏和を表している」と書いているところを見れば、「天寧」の表す意味をまったく違って理解していたわけではないといえる。

本堂の裏手に、堂宇に付属した「書院」がある。パーソンズが宿泊した「小さな離れ」とは、その「書院」のことである。ここは、かつては藩主が訪れる御成書院であった。明治25年当時、天寧寺は、現在は受付の前の駐車場になっている場所にも広い建物がたっており、寺の家族はそこで生活していたようである。書院が「住職一家が生活していた部屋とはかなり遠く隔たっていた」とパーソンズが書いているのは、現在の建物配置からは分かりにくい文であるが、彼が泊った当時はその通りだったのである。

さて、その書院にすぐ接して、小ぶりではあるが見事な庭園が造営されていた。パーソンズはその庭について、次のように記している。

私の部屋に付いていたベランダの角は、魚が泳いでいる池の上に張り出していた。ベランダの角の右側にも左側にも踏み石が置かれていて、そこから、幾許かの広さの平坦な庭へ降りることができた。古庭の背後に屹立する山の斜面には、松林が広がっていた。そしてこの山の麓のそこそこに、石が突き出していた。だが、よく眺めれば、それは、仏陀と十六人の最高位の弟子たちの石像が立ち並んでいるのだった。それらの石像の足元はツツジの下生えで覆われていた。石像たちは自然石を粗々しく彫ったものだったが、地衣類や苔に包まれ、今ではもう自然の石そのもののように古色蒼然として見え、少し離れて眺めたときには、自然の石なのか石像なのかほとんど見分けがつかない。十六羅漢が立ち並ぶ斜面には、石ころだらけの九十九折の小道。それは叢林と松林のあいだを縫う踏み跡程度のものにすぎないのだが、が何本があり、

4) 五百羅漢堂と本堂の建立年については様々な説があるが、本稿では『彦根の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書(彦根市教育委員会1983年)の記述に拠った(同書60頁)。

山の尾根の頂上まで通じていた。頂上からは、この寺の裏山よりもっと多くの松が生えている尾根をもつ山〔訳注：城山や佐和山など〕と、それらの山のあいだに挟まれた沃野が見下ろされた。琵琶湖沿いの明るく輝く平野の西方には、いくつかの瀉や島、遠くに聳える山々も望まれた。私は幾度となくこの山の頂上まで歩いて登った。ときには、晴れた月夜の晩にも頂上まで行ってみた。そんなとき、ツツジの淡い桃色や赤色の茂みを眼で確かめることはほとんどできなかったが、ツツジの花から漂ってくる甘い香り スイカズラのような を嗅げば、そこにツツジが花を咲かせていることが知られるのだった。

パーソンズが泊った書院の前にある庭は、池泉回遊式の庭園である。それが造られた経緯については詳らかではないが、11代藩主直中以後に造営されたものとされている。直中の息子である13代藩主井伊直弼はこの庭を好み、「影うつす池の錦のその上になほ咲きかかる系萩の花」という歌を詠んでいる。

池の背後には、裏山の荒々しい自然の岩肌に、西国の十六の大名から寄進されたと伝わる「十六羅漢」の石像が配置されており、パーソンズは、最も高い場所に座している仏陀、その下の斜面に点綴する羅漢像、満開のツツジの花を組み合わせた絵を描いている（次号「 . パーソンズが天寧寺で描いた6枚の画」の②を参照）。

また彼は、裏山の頂きか、あるいはそこへ登る道（現在は草木が繁茂してはっきりした道はなくなっている）の途中からか、彦根城が聳える城山と、佐和山、その間に広がる水田や松原内湖、さらには遠く琵琶湖対岸の山々の霞むシルエットを描いた作品も残している（次号「 . パーソンズが天寧寺で描いた6枚の画」の④を参照）。

上の“Notes in Japan”における記述から、現在では広葉樹が支配的になっている城山（金亀山）であるが、当時は「松」が今よりずっと多かったことが知れる。また、天寧寺境内の十六羅漢像の足元にも、さらに寺の裏山にも、その頃は「ツツジ」が実に多く見られたことも分かるのである。

II . 天寧寺での自然観察

パーソンズの“Notes in Japan”の特徴の一つは、日本の自然の様々な面を実

にきめ細やかに丁寧に書き記していることである。彼の文章を読むと、花と風景を描く画家として、また造園家として、植物はもちろん、その他の生物にも、そして自然すべてに、通常の人よりも強い感受性を備えていたことが分かる。自然に対する彼の鋭敏さは、視覚の面だけではなく、聴覚の領域でも発揮されていることは、たとえば、天寧寺で過ごした夜のことを記した次のような一節からも見て取れる。

寺がある高台の下に広がっている水田から聞こえてくる無数の蛙の鳴き声の、止むことのない合唱を除けば、ここはすべてが静寂に包まれていた。日中になると、林の至るところで蝉が絶え間なく騒がしい鳴き声をあげていた。

またパーソンズは、宿泊している書院のすぐ横にある池の中に棲んでいる小さな生き物にも慈愛に満ちた眼差しを向ける。

私の部屋のベランダのすぐ下にある池には、鯉や生まれたばかりの小亀がたくさんいた。鯉と小亀は、私が縁側の手すりに寄りかかる姿を見るやいなや、餌をもらえるかと思って、急ぎ近よってくる。年を取った亀たちはもっと恥ずかしがり屋で、私がそれらの姿を見ることができるのは、ひどく暑い日ぐらいで、老亀たちは石の上で甲羅干しをしていた。しかし私が近づこうとすると、池の中にぼちゃんという音を立てて滑り込んでしまうのだった。それでも、庭の砂の地面の一角で、一匹の亀が穴を隠そうとして砂をかけるのに奮闘していたのを見つけたときには、それを捕まえることができた。亀はその穴の中に、なめし皮のように見える白い卵をいくつか産み落したばかりだったのだ。

「亀」は パーソンズが見た亀の子孫かどうかは分からないが 今でも天寧寺の庭の池中に棲息している。彼はまた、寺の近辺で見られる「蝶」や「蜻蛉」、「蛩」、さらには「蛇」などについても記述している。

夏が到来し気温が上昇し始めると、虫の数はますます多くなった。昼間には華麗な蝶や蜻蛉たちが姿を見せ、夜になれば、稲田の上を無数の蛩が乱舞した。……

暑い日になると蛇たちも姿を現す。蛇たちの中には、相当大きなものもいる。どれも眼にして気持のよいものでは決していないが、それらはまったく無害である。この地

域では毒のある蛇は一種類しかない。“Mamushi”と呼ばれる小さな褐色の蛇である。その他の種類の蛇は酷く扱われることはなく、それどころか幸運をもたらす生き物とさえ見なされている。だが、マムシだけは常に殺され、皮を剥がされて、それを乾燥させたものから薬が作られる。

パーソンズは「毒のある蛇」のことをわざわざ日本語で Mamushi と表記している。天寧寺の住職を現在務めておられる山路信乗氏によれば、寺で見かけるマムシは昔から 天寧寺の赤蝮 と言われて有名だったということである。パーソンズは裏山に登ろうとしたとき、おそらく、当時の住職宗欽氏あるいはお茂さんらから、この山には Mamushi と呼ばれる危険な毒蛇がよく出るので、噛まれないよう十分気をつけるように注意されたのではないかと推察される。また、蝮を「薬」として利用することも、彼らから教えられたと思われる。

Ⅲ．パーソンズが天寧寺で遭遇したササユリ

天寧寺で接したさまざまな自然に興味を抱き、それらとの出遣いを楽しんでいたパーソンズであるが、美しい花々を発見することが彼にとってはやはり一番嬉しいことであったのは間違いない。彼は、あるとき近くの竹林で見つけた「ササユリ」について、次のように綴っている。

竹林のすぐ後ろに、じめじめした小さな溝があったが、そこにはウツギの花が真っ盛りで、そしてその下に淡紅色のササユリ (Lilium krameri) が群れて咲いていた。その花は、私がこれまで見た中で最も愛らしい花だった。天寧寺の住職は私の作品を一枚どうしても欲しいと言うので、私はユリを描いた画を一点、彼のために贈呈した。今頃、その絵は寺宝の一つとして掛けられているはずである。

パーソンズが天寧寺の竹林の近くで見たササユリは、淡紅色の大きな花卉、笹に似た細長い葉、強い芳香をもつ清楚可憐な花で、確かに「愛らし」く美しい。学名は *Lilium japonicum* といい、まさに日本を代表するユリである。ササユリは、パーソンズが来日する20年ほど前の1871年に、日本からイギリスのキュー王立植物園に送られ、その美しさが大変な評判を呼び、人々はその球根

を渴望した。パーソンズはイギリスにいたときすでに、遠く日本からはるばる船で運ばれてきた球根から大事に育て上げられたササユリを眼にしていたと思われるが、清楚で「愛らしい」ササユリの花が、日本では人家のすぐ近くに野生状態で「群れて咲いてい」るのを発見したときの彼の驚愕は想像に難くない。

なお、パーソンズがササユリの学名を、現在の通常の *Lilium japonicum* ではなく、「*Lilium krameri*」としているのも注目される。この名は、明治初めに横浜で貿易商を営んでいたイギリス人 Kramer の名前に因んで付けられたものである。クレイマー商会は、イギリスで熱狂的に愛好されていたユリの球根やその他の日本産の観賞用植物の輸出を行っていたが、ササユリを“Kramer Lily”と名づけてイギリスに送っていた。そのためイギリスではササユリは長い間その名で呼ばれており、その結果 *Lilium krameri* という異名も有しているのである⁵⁾。

当時イギリスでは、植物愛好家や庭園愛好家にとって、ササユリ、そしてそれ以前にすでに日本から大量に輸入されていたヤマユリ、カノコユリなどは、その花の豪華さ、芳香の強さゆえに非常に価値のある花だった⁶⁾。そのように貴重な鑑賞植物であるにもかかわらず、日本では昔からその球根が食用にされていた。そのことはパーソンズには瞠目すべきことだった。天寧寺でも、のちに触れるように、お茂さんが夕食に「ユリ根の砂糖煮」を供している。そして7月上旬に彼が鎌倉に滞在していたとき、その付近の地で、「輸出用の球根」を育てるための「ヤマユリとテッポウユリ *auratum* and *longiflorum* lilies の畑」を見ているが、それに関連してパーソンズは、「ユリは日本人自身にとっては特に賞賛すべき花の中には数え入れられていないし、また日本人はユリを装飾用の花であるとも思っていない」、また「ヤマユリはこの辺の低山地域で普通に見られる野生の花であり、その根を茹でたものは野菜の一つとして好んで食

5) 白幡洋三郎『プラントハンター』講談社 2005年、259頁以下参照。

6) 「大日本外国貿易年表」によれば、明治25年、日本からの外国向けのユリの球根の輸出額が、ドイツへは2,619,740円、アメリカへは9,460,660円、そしてイギリスには17,948,150円となっており、とりわけイギリス人がユリの球根を熱心に求めていたことが分かる。注5)の文献の260頁を参照。

べられている」と述べている。さらに、「私は食用にするのに最も適している
と見なされているユリをここで探し出そうとしたが、ついにできなかった」と
も記しているが、パーソンズはその際、「お茂さんが、食用に向いているのは
赤い色のユリであると私に教えてくれた」ことを思い出している。

山野に普通に自生し、食用植物扱いされていた日本と、華麗な観賞用植物と
して宝石のように珍重されていたイギリスとで、ユリに対して抱かれているイ
メージがあまりにも異なっていることを、このときパーソンズは改めて認識さ
せられたのである。

IV. 寺の人々との親しい交流

パーソンズは当時の天寧寺の住職を務めていた宗欽氏の家族について、次の
ように書いている。

寺の家族は、父の宗欽(Sokin)、母のお茂さん(O Shige San)、そして息子の高木(Takaki)
の三人だった。息子の高木は彦根の警察署に勤めていた。家族はすぐに私を友人とし
て温かく迎え入れ、三人とも、私が快適に過ごせるよう、できる限りの気遣いをして
くれるのだった。高木は近代的教育を受けていた(彦根の学校では英語が教えられて
おり、そのことは、街中で、少年たちがあなた⁷⁾のすぐあとについて歩いては、A, B, C
と叫び声を上げることから分かる)。しかし、高木は“Yes”という語以上は喋ることが
できず、どのセンテンスも“Yes”という言葉で始めるのではあるが、いつの間にか日
本語に移り変わってしまうのだった。私たち、すなわち彼とマツバと私は、一緒によ
く遠出を行った。また夕食後、街へ下って、街中をぶらぶら歩いたり、いくつかの芝
居小屋や商店を覗いたりもした。

パーソンズは“Notes in Japan”の中で、寺の family は“Sokin the father, O Shige
San the mother, and Takaki, a son”の三人だったと書いている。この Sokin が「宗
欽」という号であることが確認され、Takaki が名前ではなく、「高木」という
苗字であることが判明したのは、彦根市の洋画家島戸繁氏がパーソンズについ

7) パーソンズは“Notes in Japan”では、将来日本に旅行するかもしれない読者に対して「あ
なた」と呼びかけている。

て一文を書き残されていたおかげである⁸⁾。

島戸繁氏は、昭和28年に発表した「水彩画家 アルフレッド パーソンの事 (ALFRED PARSONS 1847 1920)」(『滋賀県立短期大学雑誌B』第4号)という論文の中で、高木一家について次のように記している。「住職高木氏の令息喜三郎氏は警察官をしていたが退職後彦根町会議員⁹⁾となり町の有力者として活躍していたのであるが今は亡くなって現在は娘さん二人が市内二番町に居住してられる。そして其の家にはパ氏の描いた百合の花の水彩画やパ氏のサイン入りの肖像写真や、書簡等が大切に保存されている。」

「宗欽」氏は天寧寺第八世の住職である。息子の「高木喜三郎」氏は明治3年の生まれで、昭和21年5月に77歳で亡くなっておられる。従って、パーソンズが天寧寺に寄寓していたとき、喜三郎氏は22歳くらいだったということになる。喜三郎氏は、のちによしさんと結婚され、よしさんとの間に五人の子供がおられたが、長男と次男は太平洋戦争時に戦死され、また、祖母の O Shige San (お茂さん)の名を受け継いだと思われる長女の茂子さんも、大戦中に亡くなられている。しかし、あとのおふたりの姉妹は現在でも近江八幡市と彦根市で元気に暮らしておられる。二番町の住まいを出られて、現在は彦根市中藪町にお住まいの妹の高木久子さんのお話によると、「パ氏の描いた百合の花の水彩画やパ氏のサイン入りの肖像写真や、書簡」はしばらく以前まで箱の中に入れて大切に保存されていたが、残念ながら事情があって失われてしまったということである。久子さんの記憶によれば、パーソンズが描いた百合の絵は、色紙

8) パーソンズの“Early Summer in Japan”が1894年に *Harper's New Monthly Magazine* 誌の9月号にまず一度掲載されたことは、注1)で触れたが、それが、早くも1895年1月には日本で訳出され、博文館発行の雑誌『太陽』創刊号の「海外思想」を紹介するコーナーに「日本に於ける初夏」と題されて載っている(和訳者の名は明記されておらず、またこの翻訳は原文の全部を完訳したものでなく、所々で大幅な省略が施されている)。ここでは、Sokinは「ソーキン(宗欽か?)」と疑問符付きになっており、また Takakiは「高樹」という字が当てられている。のちに雑誌『みづゑ』第37, 38, 39号(明治41〔1908〕年5月, 6月, 7月号)にも、鶴澤四丁による“Early Summer in Japan”の和訳(こちらも抄訳)が掲載されたが、ここでは、Sokinは「ソーキン」、O Shige Sanは「オシゲサン」、Takakiは「タカキ」と、すべてカタカナで表記されている。

9) 『彦根市史 下冊』(1964年)の「歴代彦根町会議員」リストによれば、高木喜三郎氏は大正6年4月からと大正14年4月からの二期、町会議員を務めている。

よりも小さな、細長の紙に、百合一輪が描かれた白黒のスケッチ画だった。パーソンズが喜三郎氏に送った書簡もその箱の中に確かに入っていたということである。パーソンズが書いた1912年3月19日付の手紙のオリジナルはもはや失われてしまったが、幸いなことに、島戸繁氏の論考中にその手紙を和訳したものが掲載されている。私たちは島戸氏のおかげで、その手紙の内容がどのようなものであったかを知ることができるのである。島戸氏の論文中に和訳されているその貴重な手紙の全文を、以下に引用する。

拜啓、去二月十日付貴翰ジョイシー氏の手を経て正に落掌仕候、貴兄不相替小生を御記憶被下有難存候小生が貴国に滞留中天寧寺へ参詣せし事を追懐すれば誠に愉快に存申候、小生は貴兄の御両親の御事や天寧寺に有りし美なる百合の花の事などを想起せば実に懐旧の情に不堪候、小生御北堂様の永眠被遊候趣を承り御愁傷至極に奉存候、ジョイシー氏が御尊母様に面会せし折には御健勝なりし旨申居候ひしに今や溘焉他界の由御嘆きの程もさこそと奉察候、小生は己に類齢に相成貴国へ再遊する事は覚束なからんと信じ候、併し小生は貴国の友人数名を有し居候間誠に楽敷被感候、御知人にして当倫敦に御来遊の御方も御座候はゞ拙宅へ御来駕侍上候、貴兄が英語に長足の進歩をなされ候は大賀至極に奉存候、小生が天寧寺に於いて英語を拝見致候頃には比すれば雲泥の相違、可驚上達に御座候、貴兄の英語に於けるが如く小生も貴国語に熟達致度きものに御座候、百合の花御割愛の旨誠に有難く奉存候、御恵与被下候はゞ精々培養可致候終に貴兄の御健康と御成功及御令閨様御子供衆の御清福を祈上候

一九一二年三月十九日

ロンドンにて パアソン

高木喜三郎様

この手紙の文面から、お茂さんがこれより少し以前に急逝したことを、喜三郎氏がパーソンズ宛の2月10日付の手紙（英語で書かれた）で伝えていることが推測される。お茂さんが1912年初めに（あるいは1911年中という可能性もある）突然他界してしまったことを、喜三郎氏は、20年ほど前に遡るとはいえ天寧寺滞在時にあれだけ親しく交流したパーソンズ氏にも知らせなければならぬと思ひ、2月10日付の手紙をしたためたのだろう。

また、この手紙には、パーソンズが彦根や日本滞在中に特に愛でたユリを

その球根と思われるが 喜三郎氏がパーソンズに贈ろうとしたことも書かれている。先述したとおり、パーソンズは“Notes in Japan”において天寧寺で見たササユリの花がそれまで見た花の中で「最も愛らしい花だった」と書いており、そうした感想は寺滞在時にもきっと住職一家に話していたと思われる。また、そのササユリの花を描いた画を彼は天寧寺に残してきているのである。上の書簡中には「天寧寺に有りし美なる百合の花の事などを想起せば実に懐旧の情に不堪候」という文言もあった。こうしてみると、「ユリの花」はパーソンズと天寧寺の人々との親しい結びつきを象徴するものになっていたともいえるだろう。

書簡中に登場している日本人の「友人数名」とは、島戸氏も指摘しているように、水彩画家の三宅克己、大下藤次郎らのことを指すと考えられる。三宅克己(1874-1954)は1898年にイギリスへ行き、パーソンズのアトリエを訪れ、歓待されている。そのときのことを、三宅は後に次のように回想している。「倫敦に来て……或る日、ケンシントンに近いベッド・フォード・ガアデンと云ふその名からして美しい街に、アルフレッド・ピアソンズ先生を訪問した。……此所はまた百花爛漫と咲き乱れた前庭があり、瀟洒な別荘風の住宅であつた。……ピアソンズ先生は極めて軽快で、自然に親しみが出た。明るい美しい部屋で、日本流に茶菓などのもてなしに遇ひ、水彩画のスケッチなど二三枚示されたが、今更ながらその技巧の優れて居たのには一々驚嘆の外は無かつた。その写実の妙技は人の手で描いたものと云ふより、完全な天然色写真版とも見ゆる程であつた。……半日否一日でも居たかつた先生の画室を無理に遠慮して、暇乞して帰途に就いた……」¹⁰⁾。また、三宅の友人である大下藤次郎(1870-1911)も、1903年前半時のイギリス滞在の折に、ロンドンのパーソンズ邸を訪問している¹¹⁾。

10) 三宅克己『思ひ出つるまゝ 三宅克己自傳』光人社 1938年、132-134頁。なお、三宅は1901年末から翌年秋まで再び渡欧してロンドンとパリ(パリへは1902年2月か3月に移っている)に滞在しており、さらに1910年1月から翌年6月にかけても、イギリスを初めとしてヨーロッパ各地を旅行している。しかし、2回目と3回目のイギリス滞在時に三宅がパーソンズを訪ねたかどうかは、分かっていない。

さて、天寧寺滞在中パーソンズは、一家の友人として、それどころか、あたかも家族の一員であるかのように温かく受け入れられた。

パーソンズは、住職の宗欽氏からは、「彼の物故した後援者である井伊掃部頭」(his lamented patron, Ii Kamon no Kami)の茶道具で茶をたててもらい、茶道の簡単な手ほどきも受けている。また、ふたりともタバコの大的愛好家だったので、その点で互いに共感することが多かった。ふたりは夕食後、酒を飲み、タバコをふかしながら語り合った。住職は自分が使っている煙管を、画家は自分のパイプを、互いに相手に貸し与えて体験させてみるというようなこともあった。住職は、昼間パーソンズが制作しているあいだ、彼の邪魔にならないように気を遣っていた。しかし、

私が画を制作している間、他人に近くで見られるのを嫌がることを、老住職は知っていた。だから住職は自分の小部屋に座ってはいたのだが、そこから、私が庭園や、山の斜面に立っている石仏たちのところで仕事をしているのをずっと観察していた。そして私のパイプの火が消えたのを見て取ると、別のパイプをマッチ箱と一緒に私のところへ運んで来て、それに新しくタバコを詰めてくれるのだった。しかし、それは口実で、本当は、ほんの数分の間とはいえ、私の肩越しに、私が何を描いているか見たかったのであり、私と少しでもいいから話をしたいのだった。

一方、お茂さんは、パーソンズにとって最良の日本料理の案内人だった。彼女は每晚、イギリス人のパーソンズにとってはたいそう珍しい料理を次から次へと出してくれるのだった。パーソンズが仕事を終えて、日本式の熱い風呂に入り、木綿の着物“Kimono”に着替えて畳の上に腰を下ろすと、見慣れない料理が続々と膳に運ばれてきた。彼は、それらが何であるかを辞書の助けを借りて調べながら味わった。彼がおいしいと思ったのは、「鰻の蒲焼、焼き魚、豆腐の田楽、筍、菊の葉の天婦羅、そしてユリ根の砂糖煮」だった。しかし「米

11) 汀鷺(大下藤次郎)「アルフレッド・パルソンス氏を訪ふ」、『みづぶ』創刊号(明治38年7月)を参照。その他、三宅や大下の仲間の水彩画家たちがイギリスへ行っただけにパーソンズを訪れた可能性がないとはいえない。たとえば、丸山晩霞(1867-1942)は1901年と1911年に渡欧し、イギリスにも滞在している。また、石井柏亭(1882-1958)も1910年12月から渡欧し、1912年10月に帰国している。

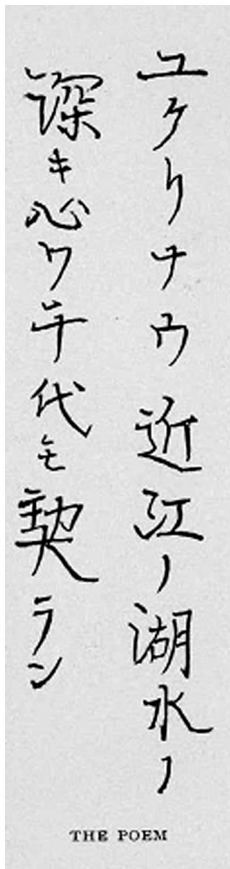
とハーブで出来たソーセージ」(海苔巻き寿司のことか)や「奇妙な野菜のいくつかの種類」は、どうしても口に入れることができなかった。パーソンズがそれらの料理を試しているあいだ、お茂さんは彼の「目の前に跪き、たえず酒を私の杯についだり、ご飯のお代わりを勧めたりしていた。そして、私〔パーソンズ〕が料理を一つ食べるたびに、それが私の口に

合ったかどうか心配でたまらないといった表情をして、私の反応をじっとうかがっているのだった。」

若い喜三郎氏とは、パーソンズはマツバをも交えて「一緒によく遠出を行った」り、「夕食後、街へ下って、街中をぶらぶら歩いたり、いくつかの芝居小屋や商店を覗いたりもした。」また、喜三郎氏はパーソンズと別れるに際して、彼のスケッチブックの一枚に「ユクリナウ近江ノ湖水ノ深キ心ワ千代モ契ラン」と揮毫して彼に贈った(左図)。パーソンズはこの歌について“Notes in Japan”の中で、「私が天寧寺を去る前に、彼は私のスケッチブックの一つに、日本の文字で歌を一首揮毫してくれた。これの読み方は、“Yukuri no Omi no midzu-umi no fukaki kokoro wa chiyomo chigiran”であり、これのだいたいの意味は 琵琶湖の水が深いように 私の心も永久に忠実で変わることはないだろう、機会があって一度私たちが結びついたからには というものである」という説明を付している。この歌は、百年以上もの昔に一人のイギリス人画家と若い日本人青年との間に結ばれた友情の記念として注目すべきものといえる。

のといえる。

こうして、天寧寺の老住職宗欽氏、お茂さん、喜三郎氏の三人は、明治25年初夏に訪ねてきた異国からの客人を心温かく迎え入れ、誠意を尽くして歓待した。パーソンズがおよそ20年後に喜三郎氏に手紙を送った際、天寧寺で過ごし



た日々が実に楽しかったことを懐かしく思い出すと書いているが、その言葉は文字通りに受け取ってよいと思われる。

V. お茂さんによる養蚕

パーソンズは、彼が天寧寺に滞在していた期間中、お茂さんらが養蚕の仕事に追われていたことを興味深げに記述している。

いまの月、家族は皆、蚕の世話で多忙を極めていた。蚕には、絶え間ない世話と餌やりが必要だった。私は蚕を見せてもらったが、最初は家の外に建てられている小屋へ連れて行かれた。そのときは蚕はまだほんの小さな黒粒のようだった。蚕が少し大きくなると、この小屋の空気が適さなくなり、蚕は本堂の中へ移された。そこに鎮座しておられる仏陀の見守る前で、蚕の身体は驚くべき速さで成長していった。切り刻まれた、籠数杯分もの桑の葉を、それが準備されるやいなや、あっという間に蚕たちは貪り尽くしてしまう。蚕たちは、四角形の骨組の棚に積み重ねられたマットの上に、ぎっしり群がっていた。各々のマットの上には、ネットが敷き広げられており、そのネットを持ち上げると、桑の葉にくっついていてる蚕たちも簡単に持ち上げることができる。そのため、蚕の糞や食べ残した葉をほんのわずかな手間で取り除くことができるのだった。蚕が成長するのを止め、身体を直立させて、これから糸を吐き出そうとするときによく見られる、頭を空中で振り回し、いかにも落ち着かなそうな動作を始めると、蚕たちは、藁で作られた小さな巣、あるいは折った小枝を束ねたものの中に移される。それからまもなく、蚕たちは大量の柔らかな黄色の繭になるのである。この時期はお茂さんにとって気を抜くことができないときで、なにしろ彼女の収入のかなりの部分は絹の収穫にかかっていたからである。繭の値段は一石（一石というのは5ブッシュェル bushel よりやや少ない量に相当する）につき、約30円であった。

ここでもパーソンズは、池に棲んでいた亀をじっくり観察し続けたときと同様の鋭敏な眼差しで、小さな生き物の身体の変化といろいろな種類の動作を細かに観察している。

当時の日本では、外貨獲得の有効な手段として、政府や県の強力な指導のもとに各地で養蚕・製糸業の振興が図られ、また士族授産の格好の業種としても大いに奨励されていた。滋賀県でも特に彦根では、「町が勸業政策として養蚕

奨励を推進したこと、旧士族屋敷跡の土地利用として桑作が好適であったこと」もあって、養蚕業がたいへん盛んだった。町には、彦根製糸場を初めとして陸続と製糸場が設立され、「町内空地には至るところ桑園が経営され、養蚕が行なわれた」¹²⁾。彦根は県下でも養蚕業の中心となっていたのである。とはいえ、農家や通常の民家でならともかく、この時代、天寧寺のような寺院においても蚕の飼育が営まれていたのは、意外であると言ってよいのではないか。当時はそれだけ繭の需要が大きかったということなのだろうが、ともあれ天寧寺のお茂さんは良質の繭を作ろうと日夜、蚕の世話に精力を傾けていた。そして、立派な蚕を育てるためには温度管理に細心の注意が必要なことから、お茂さんらが蚕棚を寺院の本堂の中にさえ運び入れていたということが、パーソンズの記述から知ることができるのである。

・天寧寺との別れ、そして10月の再会

初夏を迎え美しい花々が咲く天寧寺で、一家の心温まる世話を受けて幸せな日々を送っていたパーソンズであったが、当時なお厳格な滞在規制が外国人には適用されていたことから、神戸へ行ってパスポートの更新の手続きをするために、6月18日、ついに寺を去らねばならなくなった。

ここで何ヶ月ものあいだ夢の中にいるようにして過ごすことができたらどんなに心地よいことだったろう。しかし、日本政府が定めていた規則により、私は新しいパスポートを取得するために神戸へ戻らざるをえなかった。旅行者というものは、放っておけば、どうしても義務を怠り、単なるのらくら者に墮してしまうのを、日本政府は賢くも見越しているのである。そういうわけで私は、天寧寺の友人たちと、苔とツツジで覆われた羅漢（ツツジの下に、深紅色の花が地面を這うように生育していたせいで、石仏の斜面はなおも華やかだった）と、そして毎夕太陽が琵琶湖に沈むのをそこから眺めたテラスに別れを告げねばならなかった。私は高台から再び日常の世界へ、鉄道の走る平地へと降りていかなければならなかったのである。

12) 『彦根市史 下冊』1964年、397-398頁、326頁。注3)でも触れた、明治26年測量「大日本帝国陸地測量部二万分之一地形図」によって彦根の土地利用を調べて見ると、確かに、かつて武家屋敷だった土地の多くが桑畑になっている。また、現在滋賀大学経済学部のある中島町も一面が桑畑だった。

私が寺を去るときは、土砂降りの雨だった。……

こうしてパーソンズは、心を深く通わせた「天寧寺の友人たち」、華やかな「ツツジ」の花に包まれた石の「羅漢」たち、夕映えの「琵琶湖」を一望できる「テラス」との別離を惜しみながら、「夢の中にいるような」素晴らしい「高台」から、「日常的な世界」へと降りていったのである。

その後パーソンズは、名古屋、鎌倉、横浜、日光、箱根などに滞在している。8月には富士山に登頂。ついで甲州街道や中山道を少し旅して、秋になると再度神戸に戻っている。そして、2回目のパスポート更新を行って旅行許可を得たあと、彼は10月6日、もう一度近江を訪ねてきている。このときは彼は米原に宿泊し、そこの宿で、天寧寺から訪ねてきたお茂さんと息子の喜三郎氏らと再開した。またその際、長浜の曳山祭りを一緒に見物することを取り決めている。実際、10月半ば（おそらく16日）に、約束どおり「天寧寺の友人たち」がパーソンズを長浜を訪ねてきて、長浜の宿で夕食をともにし、そのあと一緒に曳山祭りを見に行っている。祭りが終わって宿へ戻る途中、道端に並んでいるたくさんの屋台で売られていたパイプや小袋、安物の装身具類、髪留め、櫛などの土産物をパーソンズが買おうとしたときには、お茂さんの「買い物上手ぶり」が遺憾なく発揮されたという。彼は述べている、「彼女は十銭までという彼女なりの制限をもっていて、もと付いていた値段がいくらだったとしても、大抵はその金額で品物を手に入れることに成功した」と。

これが、パーソンズと天寧寺の人々が実際に会って話をした最後の機会となった。

（以下、次号）